

0256

昭和二十五年九月

第十四軍作戦記録  
尚本

陸軍

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

本第四十四軍作戦記録書は昭和十五年八月に起書したるものに  
 して作戦諸記録の焼失及記憶の喪失に由り細部に亘り記  
 述するを得ず且重要たる事項に關しても只其の概要を記憶  
 しあるに過ぎざる爲に如すしも正確日期し得ざるも軍司令印幕  
 僚にて物語せる者や兵站主任の元瀧考博及小倉の二名にして  
 本記録は元瀧考博の記述せるもの  
 にして内容の正確さ及文意の明白さ及文意の明白さ  
 及び文意の明白さ

この月、書は十二頁のついでに所なり

第四十四軍編制以来の事項については概ね其の事件を記述し

得たるものと思考するも内容は尚検討を要あるを以て此れを其

礎として更に事情に精進せる人々の訂正加除を得て之を確たる

つねに

記録完成のゆえに望外の苦慮を要するところなり

昭和二十五年八月

元第四十四軍参謀 加藤竹夫

(精報防衛編成部)

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

陸  
軍

備考

本記録を復員局より提出するに就ては一應  
 元軍司令官本師中將に報告し若干の語を應  
 取したるも本記録は同一旨の目を通し其の  
 加筆を求めに充て合の對方の承諾を得ず  
 従つて本師中將の意見として後日他の記  
 録資料蒐集せられ本記録が完成する前に  
 改めて一讀したるに於て希望を附陳せ  
 られたる

陸軍

一軍の戦法

軍の一軍と接觸戦したる日第一回七隊団の対にして其も強んと戦うべき戦  
 斗を行はずして強進せるを以て一軍の戦法専ら明ならず 只作戦開始  
 に先り彼等の進次は強んと強進を戒に近く戦甲介射の上空は常時在る  
 三機が戦斗機を以て掩護せらるしのみせして各兵団間の間隔は極めて  
 大きく只目的地に猪突する如き態あり 一軍の攻撃は常に戦  
 車を先頭とし且戦車を以て迂回し岩壁を遮断せんとす





軍幹部以下の素質

軍幹部の能力は極めて低く且独断の能力に乏し但し命ぜられたる限り

飽く迄遂行せんと努力す一般に軍下級将校は日本軍下士官級の鈍

力なりと言ひ得

兵は愚鈍なるもの多し自然の困難にみし或は恰

善長、其の他の悪條件によく耐え得任務遂行に對する執念はよく徹底

しあり

軍の政治教育は徹底しあり一兵に至る迄強く軍の優越性を信じあり

りて米國に對する反感大なり

尚ソ軍内に於ける皇民強兵ノニヤ兵ニ對する一々感心は若干見られるニ  
 とはきも此水加弱兵とは判断し得ず (ニヤ人に比し他の皇民強兵は一般と云  
 化強兵、知日強兵を併し)

ン軍の上の品物のみ

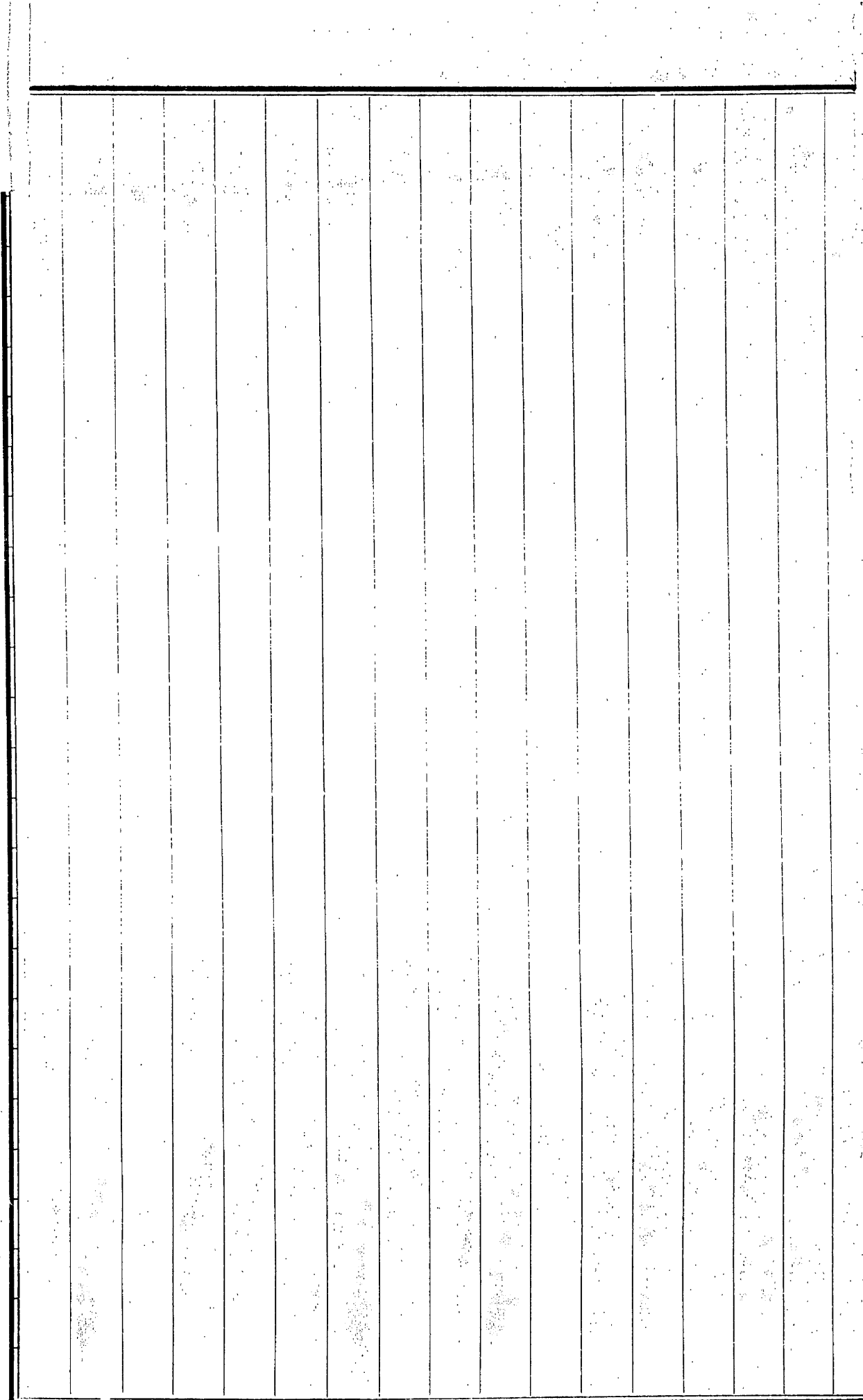
担て具々装飾は約半割の自初中鏡を有し但し是部は極少の軽快に

一と鏡と浮葉のみなり

(奉進既印隊に輕砲を以て見す)

戦車は奉天市内に遊覽せるは三十屯級之戦車のみなり

陸軍



国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp>

教訓事項

八月九月

一、用戦判断 関東軍の用戦時機の判断は諸情報と総合し八月と判断

しありたるを 装備の充実は如何に努力するも十月末と見る関係上漸次

希望的観測を生じ兵站関係の如きは十月月上旬なりと物しありたり

二、動員 用戦時期の判断に基き動員を実施せざるも 親設兵団の戦力

を低下せざるに努むる 新設兵団は装備も不十分にして国境も薄弱

結局在般の戦力低下は動員前より悪化せざるにあらずや

特に最後の特設歩隊の動員は歩隊の転進と同時に進行大なる

混亂を生ず

三、輸送の混亂

居留民の引揚に計畫性となりしと相俟つて軍隊の輸送と居留民の

引揚と同時に、且後方地帯の居留民の引揚、早く前線地帯の居留

民及軍隊の爲の列車もなく、且鉄道沿線の相違から連絡上極めて

困難を生じ、甚しきは鉄道沿線境界の駅に品員搭載の列車が機内

車もまき、一旦以上放置され、或は輸送材料の大部が在り、東線安

東線に集中せし、前線部隊は徒歩か、早く輸送せざるが如き状態を生

陸軍

す 従つて作戦資料甚乏しは部隊に依頼すも輸送し得ざる

事終るなり

四、対ソ研究の不徹底

ソ軍の進駐後兵器を果敢に擧げし如きはソ軍の

擧用手段なりしか如此は予想し得ず或はソ軍の掠奪性

を以て事 責任回避等々此の程述と思はす

又密偵制等の徹底を以て特務隊員、憲兵、警備隊の

等々にして研究不足を深感せり

五、軍隊教育の不徹底特に理論に基礎を置かず、精神教育の不十分

(五ハツ)

は、ソレに於て後、独軍と其の軍政治教育に對する反感と比較する。

時日本軍のそれは如何に薄弱なりしを思はざるなり。

六、對墨民族改革の失敗

對墨民族改革は完全な失敗なりしは、彼等の特性の把握を工夫にして

利用し得べからざるものを利用せんとし、信頼すべからざるものを信頼せん

としたる、自軍と其の如き、或は害を及ぼし、高軍の如き、何れも然り



陸軍

七、憲兵の腐敗

過激の権力を有する外地憲兵が職權を乱用し私利の追及を事とし

官民の反感を招きし悪影響は計するからざるものあり彼等はた

憲兵族の劣性敗の先聲たりしと云ふも過言にあらず

八、陸東軍第四師團の改組指導の行違ひ

陸東軍司令官の改組の行違ひを以て内閣指導の責任を問はるるに及ぶ

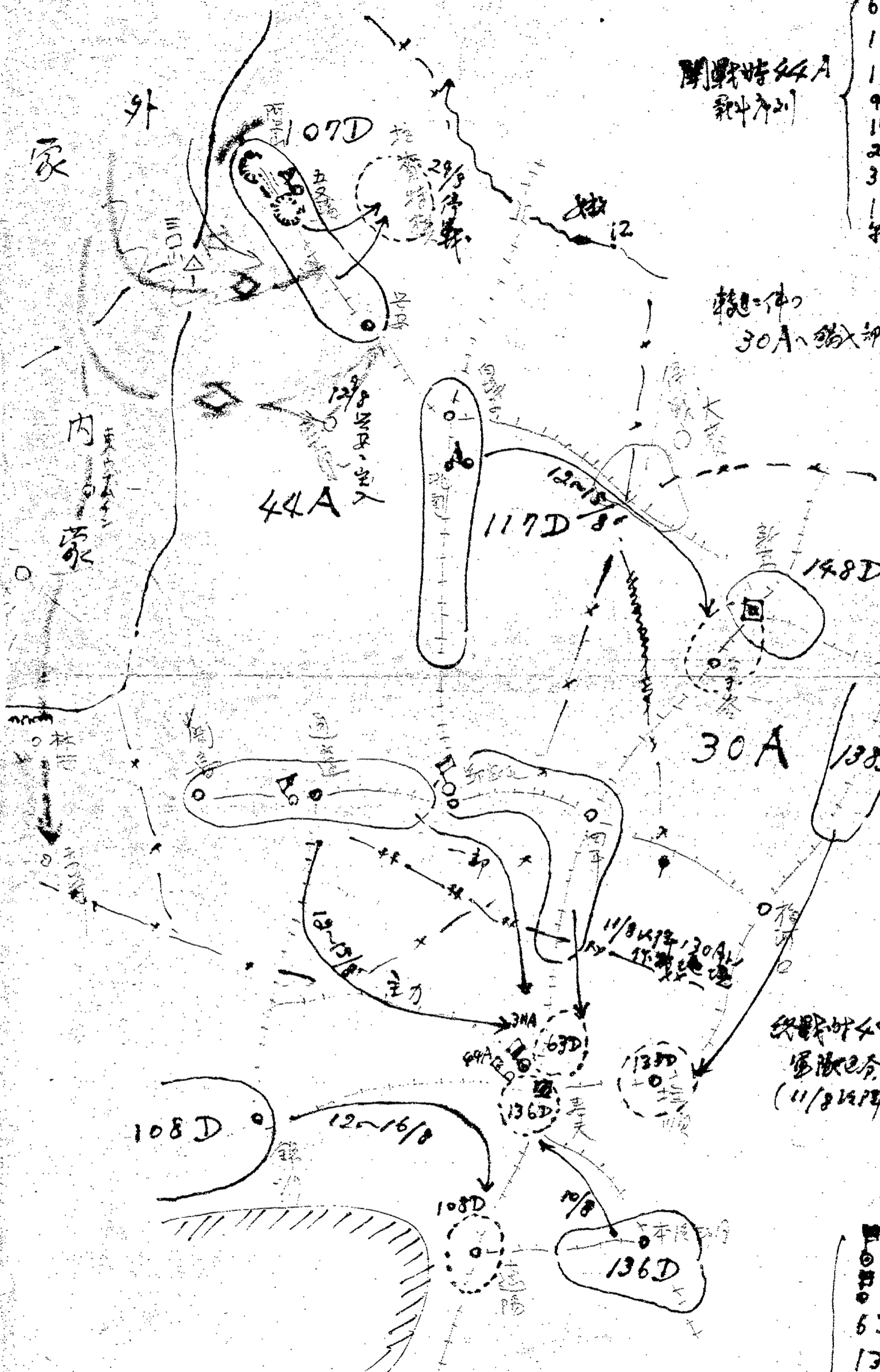
謀の幕僚が在りし諸師團官長及び民間人の反感を問ふは

りし事大なり



第四回作戦経過要図 (1944. 11. 20 現在)

1113



開戦時44A  
親中入隊

- 63D
- 107D
- 117D
- 9TKB
- 19JA
- 24TA(6)
- 31TL
- 19台
- 年令不明部隊

總司令部  
30A 親中部隊

- 107D
- 117D
- 9TKB
- 19台

終戦時44A  
軍撤収  
(11/8現在)

- 63D
- 108D
- 136D
- 130B
- 1TKB
- 22AA(B)
- 1特務
- 兵隊部隊
- (高橋師団)

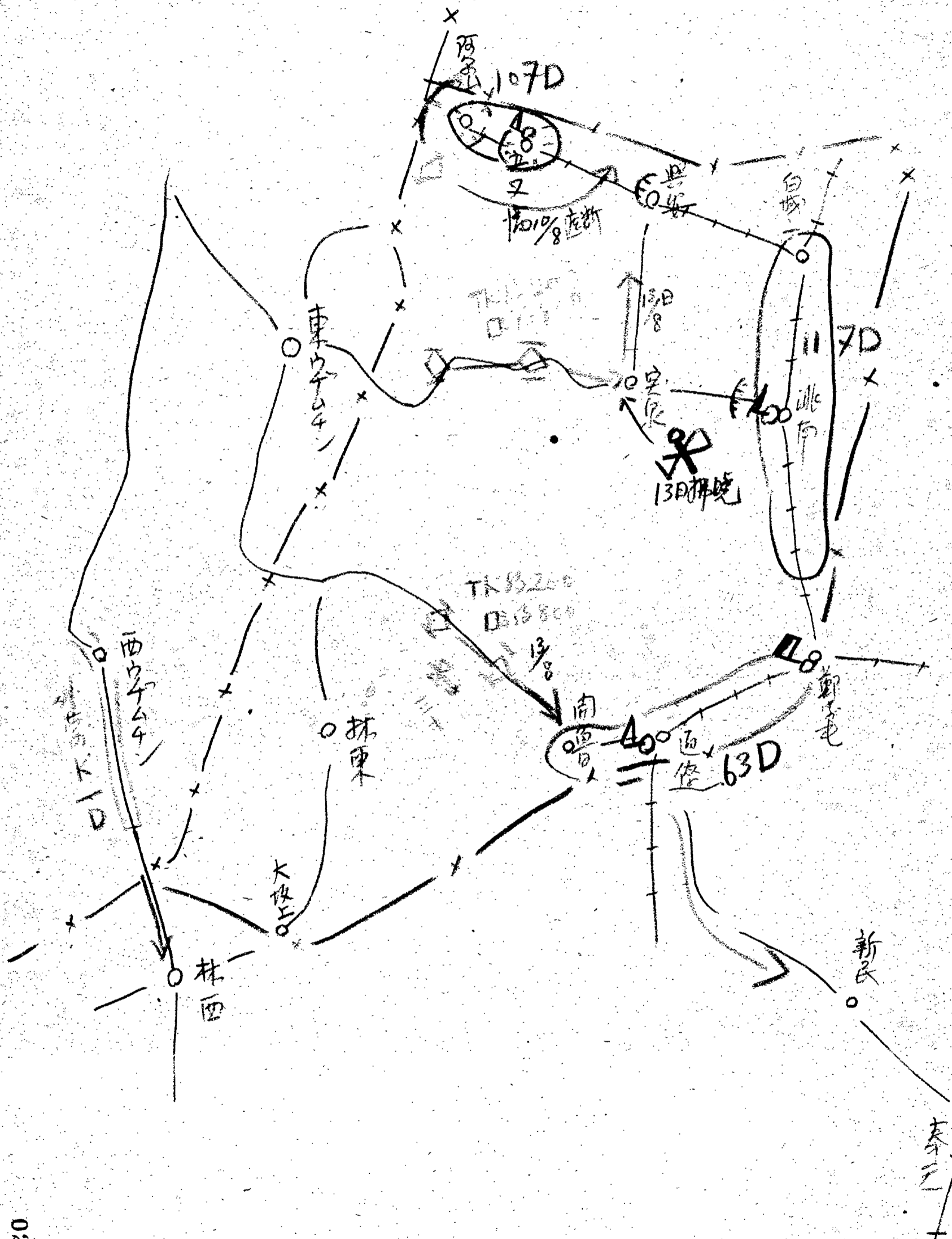
終戦時忻州南境地包兵團

- 3HA
- 6PA
- 63D
- 136D
- 130MB
- 1TKB
- 一特務
- 22AA
- 兵隊部隊
- 138D 陸砲
- 108D 砲隊

0269

細井軍子面繪開境圖

1114



0270

